

「解説」

大正七年は日本政府がシベリア出兵を宣言した年であるが、この年伊勢原糟屋の大地で日本陸軍の大演習が行われた。ちょうど洞昌院の道灌の墓の近くである。その墓前で大正天皇の詔勅を有吉神奈川県知事が代読したのがこの策命文である。

策命文とは日本の古代に宣命〔せんみょう〕体で書いた詔勅で、明治以降は贈位の時に用いる文章である。宣命体とは和漢混交文の源泉で、漢字の音訓を借り、国語の語格のまま記した上代文の形体である。洞昌院に残っていた策命文も漢字だけであるが、別の紙には代読者のために小さくルビがふつてあったので、その文章を表示した。祝詞〔のりと〕と同様に非常に読みにくいもので、有吉知事も大変だったと思われる。

因みにこの策命文の概略を記せば次のようになる。〔前島康彦著、

「太田氏の研究」より〕

「汝生を乱世にうけ、よくその主将を輔けて関左の諸州を鎮定す。その志いまだ遂げずと雖も勲績は以ってこれを称するに足る。その地を選んで築く所はすなわち今の皇居たり。其の功何ぞ没すべけん

や」